

1 学校教育目標

「くまもとの教職員像」、「県立中学校・高等学校における教育指導の重点」、「人権教育取組の方向」、「特別支援教育取組の方向」、「体育保健課取組の方向」及び本校の「白梅の精神」等に則り、「健全な心身の育成」、「学力の充実」、「地域との連携」を柱に、生徒一人一人の個性を伸ばしながら、心身ともに健全で叡智に富み、凜とした気品のある心豊かな人材の育成を目指す。

そのために、全職員が教育者としての基本的資質（①教育的愛情と人権感覚 ②使命感と向上心 ③組織の一員としての自覚）や専門性（①生徒理解と豊かな心の育成 ②学習の実践的指導力 ③保護者・地域住民との連携）の向上に努めるとともに、互いの連携と協力のもと、創意工夫を生かした教育の実践に努める。

2 本年度の重点目標

- (1) 目的と目標の明確化による共通理解に基づいた協働体制の強化
- (2) 自ら学ぶ力を育成し第一志望の実現を目指す
- (3) 新学習指導要領を踏まえた授業改善及び ICT を活用した学習活動の推進
- (4) 幅広い経験に基づいた自己変革力を兼ね備えたリーダーの育成
- (5) 道徳教育と人権教育の推進

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	教育目標実現のための体制づくり	教育目標実現や課題克服に対応した組織づくり	運営委員会を中心とした各部や各委員会の連携強化	・ 定期的な委員会開催による各分掌間の協議の場の設定	B	運営委員会を隔週で開催し、教育目標実現のための行事等について情報共有及び課題検討を行うことができた。今後は更に有機的に機能するように議題提示等を行っていく。
			今年度新設した D1L 推進部の実効的な業務遂行	・ 定期的な業務進捗状況の確認	B	新設した D1L 推進部については、定期的な進捗状況の確認によって、当初予定していた業務を概ね遂行することができた。今後は更に実効的な業務計画を検討していく。
	信頼される学校	特色ある学校づくり	英語コースにおいて更なる特色ある取組の検討	・ イングリッシュキャンプ等の活動の充実	B	コロナ禍のため、感染症対策を実施した上で、6月にイングリッシュキャンプを実施することができた。今年度実施できなかったオーストラリア研修は次年度実施予定。

			「COREハイスクールネットワーク構想」の実現	・教育委員会からの指導のもと、受信校との連携 ・コンソーシアムにおいて更なる充実のための協議	B	・当初は受信校への配信状況に課題があったが、支援員等の協力等により早期に解消された。 ・コンソーシアムにおいて、充実した事業となるよう更に協議を行う必要がある。
	働き方改革	働き方改革に係る環境整備と教職員の意識改革	教職員の平均勤務時間外在校時間の昨年度比10%削減	・毎月開催の衛生委員会での情報共有 ・管理職面談や産業医面談による改善案の提示	A	・教職員の平均勤務時間外在校時間の昨年度比10%削減ができた。 ・毎月開催する衛生委員会での改善策を速やかに実行した。今後も引き続き、時期に応じた更なる改善案を検討する。
学力向上	授業の充実	研究授業・公開授業期間の活用	全職員による最低2回の授業参観の実施	・1、2学期に約1か月の公開授業の期間を設け、共通の目標を掲げて実施し、評価シートを使ってフィードバックする。	B	・今年は3年ぶりに外部へ授業を公開した。 ・第2回公開授業期間にはオープンスクールも実施した。 ・研修大会等も実施され、同教科内の授業参観は活発であったが、他教科への参観がより活発になるように働きかける。
		ICT機器を効果的に活用した授業の実践	ICT機器を効果的に活用した授業をテーマとした研究授業及び授業研究会の実施	・公開授業や研究授業の期間に各教科でICT機器を効果的に活用した授業実践について研究する。	A	・ほぼ全ての研究授業において積極的かつ適切にICT機器を活用されており、十分授業研究及び授業実践が進んでいる。
	自学力の育成	家庭学習時間の確保	・平日2.5時間の家庭学習時間の確保 ・「Classroom」等の作成と活用	・宅習時間調査等で生徒の取組状況を把握し、授業の工夫改善等を教科会で検討する。 ・調査の分析を通して、担任との二者面談や教科担当者面談の実施 ・「Classroom」等を作成・活用し学習時間の工夫を促す。	B	・数値目標は1・2年生がクリアできなかったが、1回目より2回目の宅習時間が増加していたので、フィードバックの成果があった。 ・集計結果を職員に早く返し、生徒との面談等で有効活用できるようにする。 ・次年度は学習支援アプリを導入するので、その活用について研究を推進する。

	新しい観点別学習評価の在り方	観点別学習評価方法の確立と運用	・新しい観点別学習評価における本校の学校目標、各教科・科目の目標作成 ・各担当者による観点別学習評価を取り入れた指導計画（シラバス）の作成	・1学期には本校の学校目標、各教科・科目の目標をたて、作成した指導計画（シラバス）をもとに運用する。	B	・1学期中に本校の目標及び各教科の観点別評価規準や割合等を作成・検討することができた。 ・次年度は年度初めに指導と評価の計画を提示できるように進める。
キャリア教育（進路指導）	夢実現に心を燃やし主体的に進路を切り拓く生徒の育成	進路情報の共有化と発信	進路環境や生徒の現状に関する情報の発信と共有化推進	・3年進路検討会、1～2年学力分析会の実施と充実 ・「進路ニュース」（年4回）の発行 ・D1ネット（週1回以上の更新）等を用いた生徒への情報の提供 ・「進路だより」等を用いた職員への最新の進路情報の発信	B	・進路検討会、学力分析会を予定どおり実施することができ、今後の指導の方向性を確認する有意義な会となった。 ・D1ネットでの情報提供において週1回以上のペースで更新できた。 ・「進路だより」は11回発行できた。
		教科指導力及び進路指導力の向上	各教科との連携強化による職員の教科指導力及び進路指導力の向上	・大学入試説明会等参加の促進及び情報の還元（進路だより等） ・難関大指導研究会（校内）の実施 ・大学入学共通テストに関する分析（進路ニュース）	B	・入試説明会の内容については、「進路だより」を通して生徒に還元ができた。次年度は参加する説明会の数を今年度より増やす。 ・上位層個別指導担当者会の中で難関大指導研究会が実施でき、意見交換、情報収集の貴重な場となった。
		進路志望実現に向けた、生徒自身の主体性向上	進路志望実現に向け、生徒が主体的に選択し、探究し、活動する環境の整備	・オープンキャンパスやシンポジウム等（オンライン含む）への主体的参加の促進 ・キャリアガイダンス（出張講義）の実施（年間10回以上、平均参加者30人） ・「受験の	B	・各キャリアガイダンスの参加者は平均約50名で、積極的な姿勢が目立った。 ・資料室を整備し、資料の活用についても促すことができた。 ・次年度はオープンキャンパスやシンポジウムへの主体的な参加を促すことができるよう工夫する。

				手引き」の活用促進 ・進路資料室の整備と利用促進		
生徒指導	生徒指導の継続と徹底	基本的な生活習慣の確立	自己管理の徹底 ・整容（身だしなみを整える習慣） ・時間の厳守（時間を守ることの大切さを知る） ・基本的礼節の徹底（発声挨拶）	・整容指導、礼節指導、遅刻指導の実施（定期的な整容指導と日常生活の中で礼節指導を行い身だしなみを意識させる。） （授業開始時や集会など5分前には集合整列ができるようにする）	B	コロナ禍の影響で生徒指導関係の一斉指導ができなくなり各ホームルーム担任からの連絡や学年生徒部指導担当から整容に関する指導を行ったが、徹底することができず、クラス間で若干の温度差が出たことは反省事項である。礼節や時間を守ることに限ってはほとんどの生徒が一高性としての自覚と誇りを持って生活ができていた。
		通信機器使用に関するマナーの向上を図る。特にSNS等に関わるネットモラルの指導を徹底する。	スマートフォン使用（特にSNS）に関するマナーの徹底	・SNS等のトラブル回避のため、ネットモラルに関する教育を授業や研修会等で実施する。 （トラブル回避の啓発のリーフレットを活用する）	B	校内でのスマホ使用に関しては年度当初に比べれば落ち着きが見えてきた。SNS等のトラブル回避について防止啓発のリーフレット等を活用しているが、なかなか難しく、徹底までに至っていない。今後の課題である。
	自主自立の精神の育成	規範意識の高揚とリーダーの育成	一高祭（体育部門・文化部門）やその他生徒会主催の行事を充実させるため、生徒会活動の活性化を図る。	・生徒会を中心とした組織の中で各々が中心となって企画運営に携わり、充実させる。 ・リーダー研修会を実施して生徒会や各部活動、委員会の部長を集め部活動や各団体のリーダーを育成する。	A	・コロナ禍の中でも例年どおりとはいえないまでも、できるだけ元の状態に戻すことを念頭に各行事を実施したが、生徒会を中心に企画・運営に至るまで見事に目標を達成した。 ・各部活動の部長を集めたリーダー研修会はコロナ感染者が急増した時期と重なり実施できなかったが、各部の伝統をいい意味できちんと引き継ぎ活動ができていた。
人権教育の推進	教育活動全体を通じた人権教育の推進	職員、生徒の人権意識の高揚	人権教育推進の年間指導プログラムの実践	・3部合同（保健部、教育相談部）教育講演会の実施（年1回）		・3部合同教育講演会、職員研修でLGBTQについての講演を全生徒及び全職員対象にそれぞれ実施し、理解啓

				・2部合同（教育相談部）の職員研修（年3回） ・各学年人権LHRを実施（年3回）	B	発に努めることができた。 ・LHRにおいて、各学年で設定した課題の活動を行うことができた。
	「命を大切にすることを育む指導」の推進	自他の「命」を尊重し、慈しむ態度と心構えを育む取組、及び自らの自尊感情を高めるためのストレス対処に関する取組	教科指導や学年（学級）指導等、全ての場面で「命を大切にすることを育む指導」を根底に据えた教育の実践とストレス対処プログラムの実施	・「命を大切にすることを育む指導」プログラムを周知する。（各学期1回） ・生徒人権委員会実施（月1回）	B	・全ての教育活動において、「命」を大切にすることに配慮した指導の実践を推進しているが、引き続き、本校の実態に即した「命を大切にすることを育む指導」プログラムの検討を行っていく。 ・生徒人権委員会を開催できない月もあったが、熊本県人権子ども集会（12月）に代表生徒と職員で参加し、人権意識を共に向上させることができた。
いじめの防止等	健全な人間関係の構築	いじめ根絶に向けた取組	いじめ防止の年間指導プログラムの実践	・毎月10日（祝祭日・土日は前後の日）を「いじめ防止の日」として、「いじめを許さない宣言文」を宣誓（年10回） ・生徒人権委員会主導でのいじめ防止につながるための標語作成（年1回）	B	・いじめを許さない宣言文は、生徒人権委員が電子黒板に投影する形を昨年度から継承して毎月実施した。また、放送部の協力を得て行っているアナウンスは、好評である。 ・今年度は、いじめ防止につながるための標語作成について、募集することができなかった。
			いじめに関するアンケート実施と結果への組織的対応	・いじめについてのアンケート実施（年4回）と結果を受けての組織的対応		・いじめについてのアンケートは、各関係部署と連携を密に図り、慎重に対応することができた。
特別支援教育	生徒が安心して学校生活を送る環境づくり	気づきと理解に基づいた対応	特別な教育的支援や配慮を必要とする生徒の実態把握と具体的な支援策の検討・実施	・組織的な支援体制の構築（特別な支援や配慮を必要とする生徒への対応） ・学年会、教育相談部会、校内委員会を通しての情報収集・共有と関係職員との連携 ・生徒理解研修による全職	B	部会や学年会、生徒理解研修等を通して情報共有を行い、SCやSSWと連携して対応することができた。 可能な限り、特別な配慮を要する生徒への対応を行ったが、相談室の運用の改善が必要である。

				員の共通理解 ・ＳＣや外部 機関との連携		
地域連携（コミュニティ・スクールなど）	総合型コミュニティスクール（学校運営協議会）の実施	年間計画に基づいた学校運営協議会の計画的な実施	学校運営協議会における学校運営に関する意見への対応及び基本方針の承認	・年２回学校運営協議会を開催し、具体的な資料提示等による協議及び承認	A	学校運営協議会を２回開催し、具体的な資料等を提示して、学校運営に関する基本方針の承認を得ることができた。

4 学校関係者評価

- ・学校運営協議会で、建設的な意見を出し、温かい目で生徒を見守ってくださっていることに感謝している。同窓会としてもできる限りの支援をしていきたい。
- ・通勤の電車の中で第一高校生を見かけるが、勉学に勤しんでいるという印象を持っている。第一高校の生徒たちの頑張りを見て、子供や孫を通わせたいと思った。
- ・ホームページでの情報発信は速やかにできていると思う。
- ・近年の進路実績も目を見張るものがある。
- ・今年度も充実した学校運営がなされたと確認でき、学校評価も適切と思う。
- ・ひとつ過度な要望をあげれば、熊本の高校生には自分の住まう地域のみならず熊本全体を視野とする考え方を身につけてほしいと思う。例えば地域間格差や産業の課題などに向けては行政や政治の役割にも目配りできる視野が必要である。社会性を意識した取組にも力を入れ、第一高校として将来の有為な人材育成に向けて取り組んでいただければと思う。
- ・多様な進路選択が用意されている現状があり、学校に来たいと生徒たちに思わせる取組が必要である。
- ・在学している生徒の学校に対する評価を上げていけば、第一高校を目指す中学生も増えると思う。（生徒の口コミが受検生に響いていく）
- ・歴史と伝統ある第一高校として、学校の強みを理解してその強みを生かして頑張ってもらいたい。
- ・第一高校の歴史と伝統について、同窓生に語っていただくとよいのではないか。
- ・今後は第一高校の魅力をどのように中学生（受検生）にアピールするかになる。生徒自らが、自信をもって中学校の後輩に第一高校を薦められるような取組を期待している。

5 総合評価

- ・生徒アンケートで「よく当てはまる」、「やや当てはまる」の割合がここ３年間で最も高い。コロナ禍の中での教育活動も、少しずつ制限が緩和されてきており、制限がある中でも「どうしたらできるのか」の視点に立った活動ができていることが影響していると思われる。
- ・三者（生徒・保護者・教職員）ともアンケートにおける高評価の項目は例年と特に変わらない。努力目標となる項目や三者の評価が分かれる項目の中で、「学校行事への積極的参加」について、生徒に関しては昨年より増加しているが、保護者の評価が昨年よりも低下しているのは、コロナ禍の影響があると思われる。
- ・アンケートの「予習・復習への取組」については、生徒・保護者は例年と同様低いが、教職員については例年より高い。
- ・各教科でＩＣＴ機器を効果的に活用した研究授業を実施し、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業実践が進みつつある。
- ・コロナ禍ではあったが、実施できた行事等においては、生徒会を中心として企画・運営等を行うことができ、積極的に取り組むことができている。
- ・学校の成長という点においては、学校の強み・魅力を理解して、その魅力を発信していき、更なる学校の活性化が必要である。

6 次年度への課題・改善方策

【次年度への課題】

- ・学校の教育活動については全般的に高い評価を得ているが、魅力ある学校を広くアピールして更なる学校の活性化につなげていく必要がある。

【改善方策】

- ・学校の魅力を生徒の視点、保護者の視点、教職員の視点から分析する。
- ・学校の魅力の発信の仕方等について、運営委員会・職員会議等を通して学校全体で共通理解を図る。
- ・学校開放（学校説明会、学校見学会等）を計画し、中学生を含め広く発信する。その際、中学生に「（在校生の）生の声」を届けられるように、生徒が前面に出て運営する方法等も検討する。
- ・引き続き、学校ホームページの更新を速やかに行い、学校の魅力を外部に発信する。